帰国報告

上海日本人学校浦東校に勤務して

前　上海日本人学校浦東校（派遣期間２０１０～２０１２年度）
現　函館市立深堀中学校　教諭　池田忠寛

1. 私にとっての上海

上海には現在約４５００社の日系企業が進出しており、５万人を超す日本人が生活している。短期滞在者も含めると１０万人を超すともいわれている。日本人が生活する都市として、ニューヨークやロサンゼルスと１位を争う都市である。

日本人料理店や日系スーパーも多く、日本語が通じる店も少なくない。日本人向けのフリーペーパーも毎月数冊発行され、飲食・買い物・不動産・サークルなど、たくさんの情報を得ることができる。在外教育施設で勤めるといえば、少人数の学校運営、日本人会との協力というイメージをもっていた私にとって、上海はあまりにも日本人の多い都市だった。派遣前は現地の日本人の方々との交流を積極的に行おうと考えていたが、１００を超えるサークルや県人会の数に逆に気持ちが進まず、結局３年間現地の日本人の方々と交流する機会はほとんどもつことができなかった。

東京で見知らぬ人との交流が難しいように、大都会上海では「出会い」というものはとても難しいものだった。街角で日本人の方々とすれ違っても特に珍しいと感じることもなく、ましてや声をかけることなどもないからである。

現地の人々との交流となるとさらに機会が少なくなる。根気強く３年間続けた中国語教師との交流がほとんどであった。しかも、最後の１年間は中国語の学習ではなく、日本語で中国と日本の文化やモラルの違いについて話し合うことが多くなった。しかし、その時間が私にとっての現地理解の場となっていたとも言える。

では、上海で何を学んできたのかと問われると私は堂々と「人とのつながりの大切さ」と答えるであろう。人口２４００万人を超える上海で私にとっての社会は約７０人（３年間で１００人を超える）の職員室の仲間たちであった。日本各地から集まった仲間たちとの時間が私にとってこの３年間での財産となった。

2. 上海日本人学校浦東校について

①概要

浦東校は、上海市の中心部より黄浦江を隔てて東側の浦東開発地区に位置している。浦東開発地区には多くのビルが建ち並び、私がいた３年間のうちにも景色がどんどん変わるほど発展が加速している地区である。昔から日本人が多く住んでいたのは上海の中心部より西側の虹橋地区であった。１９８７年に開校した上海日本人学校は虹橋地区に建てられた。２０００年を過ぎ、徐々に浦東開発区に住む日本人も増加し、２００６年４月に浦東校が新設された。当時は平地に囲まれていた浦東校だが、この浦東開発地区の発展とともに日本人が住む公寓（マンション）も増え、校舎のまわりを囲むようになった。２０１０年４月には新校舎も完成し、２０１１年４月には同校舎に高等部も設立された。

現在、虹橋校には虹橋地区側（西側）に住む小学生約１５００人が通っており、浦東校には浦東開発地区（東側）に住んでいる小学生約８００人と上海市全体に住む中学生約７００人、合わせて１５００人の児童生徒が通っている。虹橋地区に住んでいる中学生は各自契約したバスや保護者の車で約１時間かけて学校に通ってきている。

２０１２年度の学級数と児童生徒数、教員数は表のようになる。小規模校をイメージしていた私にとって、今まで経験したことのない大規模校での勤務となった。

表　児童生徒数及び学級数（編入・転出が多いため児童生徒数は毎月のように変化する。）

	小学部							中学部				総計
学年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	合計	１年	２年	３年	合計	
人数	151	126	111	139	131	136	794	264	261	177	702	1496
学級数	5	4	4	4	4	4	25	7	7	5	19	44

※　この他に特別支援教室「すずかけ教室」１

※　中学部３年生の人数が少ない理由は、入試のために帰国するケースが多いためである。帰国先の学校事情によっては、２学期～３学期の帰国も少なくない。ただし、２０１１年度に高等部が開設されたからは、３年生の学級数も増え、卒業まで本校に残る生徒も増えた。

表　教職員（総計１２６名）

教職員８０名	専任教員、校長以下６９名　　中国語講師６名　　英会話講師５名
職員４６名	事務職員１３名　　看護師２名　　公用車等運転手２名　　用務員３名 門衛１５名　　庭師１名　　清掃員６名　　プール管理人４名

②教育課程

新学習指導要領の各教科標準時間を基にした教育課程を組んでいる。小学部以上の「総合的な学習の時間」には、現地理解教育・国際理解教育を積極的に行っている。また、授業において小学部から中学部まで全学年で英会話・中国語会話を週１時間ずつ取り入れており、２１世紀を生きる子供たちに必要な資質や能力、つまり「生きる力」の育成を図っている。

③行事

日本の一般的な学校と行事の大きな流れは変わらないが、現地校交流や中日スピーチ大会など在外教育施設ならではの行事もあった。また、小中合同の運動会も迫力があり特色のある行事のひとつだった。小中１５００人の児童生徒が校庭に集まり、協力して行う応援合戦や大玉転がしは日本ではできない経験だった。もちろん、その１５００人を取り囲む保護者の数は２０００人を超えていた。

この他に行事の中で印象的だったものは宿泊行事であった。小５では上海近郊に１泊の宿泊学習、小６では北京に２泊３日の修学旅行。（もちろん飛行機に乗る。）中１では紹興・杭州に中２では蘇州・無錫にそれぞれ２泊３日の宿泊学習がある。特に無錫には日系企業の工場がたくさんあり、工場見学や体験学習が行える。また、日本語を学ぶ専門学生と交流したりホテルでのマナー講座やベットメイキング、部屋の清掃、食事の準備片付け体験などもお願いできた。日本の学校のように職業体験ができない分を補う進路学習となっていた。中３には成都や西安・敦煌など世界遺産を巡る修学旅行が行われている。

編入・転出が多い浦東校だけに、短い上海生活でも多くの経験ができるような配慮が感じられた。

④工夫された時程

浦東校では登下校は保護者の送り迎えか保護者が依頼したバスによる通学と決められている。塀で囲まれた敷地内に入るためには入校証を持った保護者と共に入校するか、許可を得たバスでしか入れない。そのため必然的に下校時間は全員一斉となる。特に虹橋地区に帰る子供たちにとって５分の遅れは渋滞による１時間の遅れにつながることがあるので全４４学級は何があっても時間通りに下校させなければならないという責任と共に帰りの会を迎えている。年に何度も行われる転出者とのお別れ会、体調不良によるトラブル、急な生徒指導など全て時間内に解決するスキルと段取りが必要となり、特に中学部では教師同士の連携が必要不可欠となる。

このように放課後の活動ができない分をドラゴンタイム（小学部）・上海タイム（中学部）という毎日２０分の時間で補っている。３時間目終了後小学部はドラゴンタイム→昼食→昼休み→４時間目となり、中学部は４時間目→昼食→上海タイム→昼休みとなる。これによって１５００人が同時に昼休みを過ごすことのないよう配慮できる。ドラゴンタイムや上海タイムは委員会（委員会以外の児童生徒は読書で待たせる）や学年集会・全校集会、昼休みと合わせると行事の準備などにも使える。この時間を学級・学年・学部・全校で有効活用するために計画性が大切となる。

中学部には週２回部活動の時間がある。（７時間目に１時間活動する程度）ここにも工夫がある。その日は小学部は５時間で先に下校するのである。この２時間の差で迎えに来る保護者やバスが戻ってくる時間を生み出している。

登下校の問題や小中合同で１５００人という大所帯であるハンデを時程の工夫で補っている。

⑤研究の中で

浦東校では「学びの共同体」について研究を進めていた。細かい説明は避けるが、このおかげで小学部中学部の垣根を越えてたくさんの授業を見合うことができた。そして、子供たちに学ぶ機会をつくるためにたくさんの教師と意見を交換することができた。「学びの共同体」について研究を深めるほど、子供たちのための学び合いだけでなく、教師同士の学び合いが大切であることを実感することができた。

ここに上海と日本の四季のちがいについて考える指導実践を紹介する。もちろんグループ学習をイメージしたものだが、色々な活用の仕方ができる教材だと考える。

理科の指導実践『上海と日本の四季のちがい』

１．はじめに

函館中学校理科研究会では以前、『直接的な体験』を重視して学習指導の研修を進めてきた。科学的な事象は教師の説明だけで理解できるものではなく、直接見たり触れたりすることによって初めてイメージしやすい事象は数多い。しかし、全ての指導内容で実際に見たり触れたりする教材を用意するのは不可能である。そこで、大切なことは科学的事象を身近な事象に置き換えて紹介することである。普段体験している事象と科学的事象を照らし合わせることで、生徒は自分の経験を通して直接的な体験をすることができるのである。

ここ上海で、生徒達は日本では体験できない様々な事象と出会っている。それらの事象に注目することで、さらに、生徒の探求心を育てることができると考えられる。

今回は上海の気候に注目し、上海と日本の四季のちがいについて考える教材を研究した。

２．日本の四季について

日本の１年間の気候は、南中高度や日照時間の変化だけではなく、シベリア気団、揚子江気団、小笠原気団、オホーツク気団の４つの気団の勢力の強弱によって、春夏秋冬の季節の変化が、はっきりと現れる。

＜日本付近の主な気団の特徴＞

気　団	発生地	日本への影響	性質
シベリア気団	シベリア大陸	主に冬	低温・乾燥
揚子江気団	揚子江流域	主に春・秋	高温・乾燥
小笠原気団	北太平洋中緯度	主に夏	高温・多湿
オホーツク海気団	オホーツク海	梅雨季や秋雨季	低温・多湿

＜冬の天気＞

冬期にはシベリア気団の高気圧が発達し、オホーツクに低圧部が出来て西高東低の冬型の気圧配置が優勢になる。日本列島では、南北方向の等圧線が狭い感覚で並び、シベリア高気圧から北西の季節風が吹く。この季節風により、日本海側は降雪量が多く、太平洋側は降雪量が少なくなる。

＜夏の天気＞

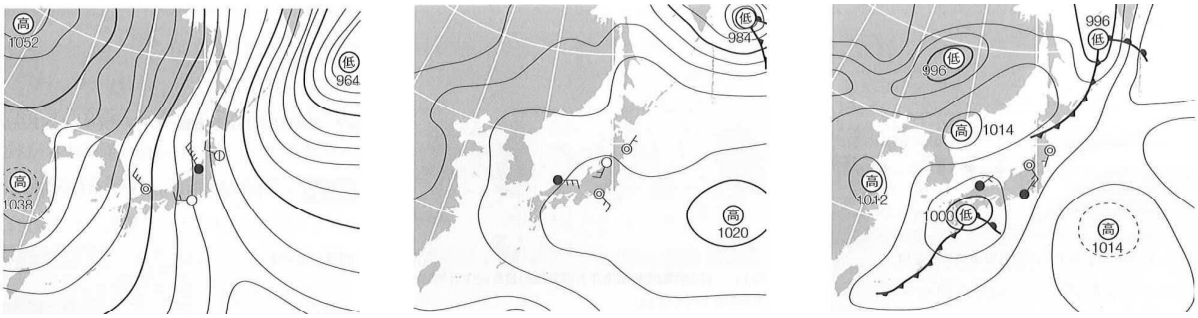
小笠原気団の大平洋高気圧に覆われ、高温多湿の晴れの日が続く。太平洋高気圧から吹く南よりの風により、太平洋側は比較的降水量が多い。

＜春と秋の天気＞

春はシベリア気団、秋は小笠原気団の勢力が弱くなり、替わって揚子江気団が張り出し移動性高気圧となって日本列島を通過する。その後に低気圧が発生して続き、高気圧、低気圧が交互に通過して好天・悪天が周期的にくり返す。

このように、南中高度や日照時間の変化に加え、気団の勢力の変化により、日本の四季はさらに特徴的なものとなっている。

＜日本の各季節の特徴的な天気図＞



３．日本（東京）と上海の気候の比較

東京と上海の月別平均気温と月別降水量を比べてみると注目すべき点が２つみられた。気温について注目すべき点は、東京と上海では緯度に大きなちがいがあるのに、年間平均気温にはそれほど差がないことである。これは冬の気温の低さが原因である。上海も日本と同じように、冬はシベリア気団、夏は小笠原気団、春と秋は揚子江気団の影響を受けるので、気候としてはそれほど変わらないはずである。しかし、上の天気図にもあるように、冬の上海はシベリア高気圧の影響を直接受ける位置にある。これが東京よりも南に位置す

る上海の方が気温が低い原因と考えられる。

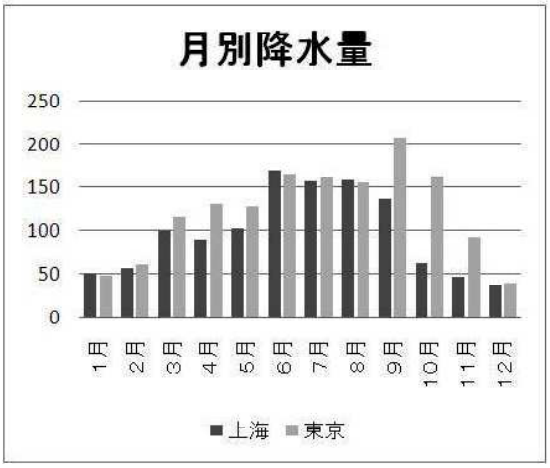
降水量について注目すべき点は、春と秋に東京の降水量が多くなっていることである。これは、春と秋の天候に影響を与える移動性高気圧が、日本を通過する前に東シナ海を通過し、その際に多くの水蒸気を含むことが原因と考えられる。

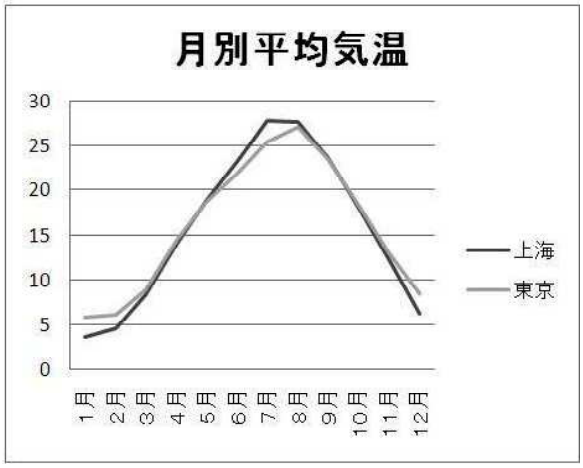
＜上海と東京の月別降水量＞

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10 月	11 月	12 月	年間合計
上海	51	57	99	89	102	170	156	158	137	63	46	37	1165
東京	49	60	115	130	128	165	162	155	209	163	93	40	1467

＜上海と東京の月別降水量＞

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間平均
上海	3.5	4.6	8	14	19	23	28	28	24	18	12	6.2	16
東京	5.8	6.1	8.9	14	19	22	25	27	24	18	13	8.4	15.9





４．教材化について

上海の気候については、「天気とその変化」の単元の中の小単元「大気の流れと日本の天気」の中でとりあつかいたい。この単元では、気象観測の仕方から始まり、雲のでき方や、高気圧・低気圧・前線による天気の変化について学習を進め、気象についての基本的な知識を身につける。そして、最後に「大気の流れと日本の天気」の小単元で今まで学んだ知識を普段体験している日本の気候について考える学習の流れができている。しかし、上海で生活する生徒達にとって、日本の気候は決して身近なものとはいえない。それよりも、なぜ、「上海の夏はこんなに熱いのに、何で冬はこんなに寒いんだろう。」という印象を多くの生徒が感じている。これは、日本より南にある上海の気候とある程度持っている日本の気候の印象を無意識のうちに比べているからである。

今までの学習した内容をもとに、普段自分たちが感じている疑問を解き明かすことができれば、学習による大きな充実感を得ることができ、さらに探求しようという意欲を生み出すことができる。この単元の学習のまとめとして上海の寒さについて考える機会を生徒に持たせることは重要であると考える。

＜指導計画＞

１．日本の周りの大気の流れ（１時間）
２．日本の天気（１時間）
３．日本の四季と上海の四季（１時間）

＜授業展開＞

１．夏の上海と冬の上海の印象について考える
（夏は蒸し暑い・緯度の割りに冬は寒い・雪は降らないなど）

２．上海と東京の降水量と気温を比べる
（夏は上海の方が熱いが冬は寒い・春と秋の降水量が上海は少ない）

３．上海の春夏秋冬に影響を与える気団を考える
（日本と同じ気団の影響を受けている）

４．同じ気団の影響を受けているのに降水量や気温にちがいが出る理由を天気図を見ながら考える

◎　東京の方が春・秋の降水量が多い理由
移動性高気圧が、日本を通過する前に東シナ海を通過し、その際に多くの水蒸気を含むから

◎　夏は上海の方が熱いが冬は寒い理由
夏が暑いのは、南にあるから
冬が寒いのは、シベリア高気圧の影響を直接受ける位置にあるから

５．実践を通して

本校は、長期休業中に日本に帰る生徒が非常に多い。そのため、多くの生徒が日本と上海の両方の気候を体感している。その中で、上海の方が南にあるのに、なぜ冬は冷え込むというイメージをもっている生徒が多い。生徒の身近な疑問に答えることができ、学習意欲の向上につながる良い教材となった。

６．生徒の感想から

・私の地元は宮崎県ですが、上海の冬はなぜ寒いのか気になっていたので、この授業でシベリア気団の影響だということが分かって良かった。今度、正月に帰ったときに祖母に説明したい。
・上海の冬は雪が降らないことが不思議だったが、この授業で納得できた。日本で日本海側の雪が多く、太平洋側の雪が少ないことの復習になった。
・僕はほとんど日本に行くことがないので、日本の気候よりも上海の気候で学習できたのが良かった。上海と北京ではどう違うのかも知りたくなった。
・日本は四季の美しい国だというイメージがあるが、それほど離れていない上海なのにこんなちがいがあることにビックリした。そういえば、地震や火山の数も日本と上海では大きくちがうので、近いようで遠い国なんだということを実感した。

3. これから派遣される皆さんへ

最初に記したように私にとって「人とのつながりの大切さ」を学ぶことができた３年間でした。日本各地から志をもって集まった先生方と共に過ごす時間はとても充実していました。しかもその仲間の３分の１が毎年帰国してしまうこと、そして、もう二度と共に働くことができないこと‥‥。そのような想いがさらにこの３年間を貴重な時間にしたのだと感じます。特に浦東校は職員の人数が多い学校だったので、刺激を受けることも多かったのですが、意識を合わせていくことも大変でした。しかし、ひとたび同じ想いで進み始めるとこれほど心強い職場はありませんでした。

もちろん派遣される先によって経験できることは大きくちがってくるでしょう。ですから心構え程度のことしか伝えられませんが、貴重な３年間という時間を大切に過ごすための参考としていただければと思います。

①３年サイクル

在外教育施設への派遣は２年から４年、３年の場合が特に多いのではないでしょうか。そうなると中学校の部活動のように先輩・後輩のような関係ができあがりがちです。その関係を良い状態で保つためにも１年ごとに目標をもつことは重要です。

≪１年目≫　日本の学校以上に先輩方に聞かなければ進まない仕事がたくさんあります。まわりに迷惑をかけているのではという不安や自分は学校のためにあまり貢献できていないのではという不安に戸惑うこともあるでしょう。ぜひ、自分が正しいと思ったことや自分の得意分野で提案できるものがあったら、進んで先輩方に相談してみましょう。そして、次年度に向けて自分ならこうしたいという想いを膨らませましょう。同じ年次で想いを共感し合える仲間がいれば最高です。

≪２年目≫　１年目に膨らませた想いや１年目に遠慮がちになっていた部分を行動に移すときです。積極的に自分らしさを発揮していきましょう。間違っていたり行き過ぎたときは必ず同じ年次の仲間や先輩がアドバイスをくれるはずです。

≪３年目≫　誰にでもアドバイスする側になっています。仕事も思った通りできることでしょう。しかし、３年目はあえて職場の和を意識して行動しましょう。３年次が立場を勘違いして先輩風を吹かしすぎ、ギクシャクしてしまう職場の噂も聞きます。細かいやり方ではなく意思統一こそが大切だということを最も伝えられる立場になっているはずです。そのような想いが伝われば自分が帰国したあとの雰囲気も安心です。

②道はちがっても

日本各地から先生方が集まっています。地域によって同じ仕事でもやり方のちがいは様々でしょう。大切なことは道がちがってもゴールが同じであれば結果は変わらないということです。今までの自分のやり方が絶対だと堅い考えでは、経験の幅を狭くしてしまいます。相手の考えをいったん受け止めたうえで、できるアドバイスをしていきましょう。

③できないと言わない

色々なリスクを背負って経験を得るために手をあげたのではないでしょうか。そんな貴重な３年間で「できない」という言葉を使うのはもったいないでしょう。頑張っていれば困ったときには必ず助けてくれる仲間に囲まれていることを忘れないでください。

④仕事だけでないつき合いを

限られた環境の中での生活では、人とのつながりが本当に大切になってきます。仕事の関係だけではなく、色々な話ができる仲間を増やしましょう。家族ぐるみの交流やサークル活動のようなものも大切だと思います。職場の外での交流が職場でいざというときに生きてきます。

4. 最後に

私にこのような貴重な体験をさせてくださった函館市を始め北海道の関係者の皆様、そして、上海でお世話になったたくさんの皆様に心から感謝しています。北海道に戻った今、自分のできることをしっかりやっていくことが恩返しと考えています。上海でお別れしてきた、たくさんのライバルたちといつまでも心の中で競い合う自分でいれればと願っています。